

「ピア・サポート」の研究論文題目のテキストマイニングによる分析 Peer support bibliography: A textmining analysis from the database *CiNii*

小澤笑子 (和光大学)

Shoko OZAWA (Wako University)

キーワード：ピア・サポート、大学生、支援

Keywords : peer support, university students, support

問題

現在、さまざまな大学において、学生同士がお互いを助け合う、「ピア・サポート」が行われている。ピア・サポートとは、川畑(2009)によれば「同世代の仲間同士による支援活動を組織し、生徒の自然な援助資源を活かし、友人に援助の手を差し伸べようとする活動」と定義している。ピア・サポートという活動は看護や心理学を含め、広く行われているが、大学生のピア・サポートは学生支援の観点において注目されている。しかし、その研究の広がりの実態は明らかでない。そこで、現代のピア・サポート研究は、どのような内容で展開されているのかを明らかにしたい。そのために、多くの論文が保存されている、論文データベースのウェブサイトである「CiNii」で検索することで、ピア・サポートに関する論文がどのくらい作られ、研究対象は何であるのか、どのようなキーワードが現れているのかについて明らかにしたい。

目的

本研究の目的は、現代におけるピア・サポート研究の広がりとはさまざまな大学で行われている「ピア・サポート活動」の報告がどのような広がりで行われているのかを明らかにすることである。【研究1】では「CiNii」で検索した文献のタイトルの分析からピア・サポート研究の広がりをテキストマイニングにより分析する。【研究2】では「大学生」と「ピア・サポート」をキーワードに限定して、【研究1】のデータをもとに、分析する。【総合考察】では、それをふまえて質的研究から生み出された、私自身のピア・サポート実践と研究との結びつきを論じる。

【研究1】2009年までのピア・サポート文献全般の分析

目的

「CiNii」を使用して、文献のタイトルからピア・サポート研究の広がりをテキストマイニングにより検討する。

方法

分析対象：ウェブサイト、「CiNii (<http://ci.nii.ac.jp/>)」に掲載されている、ピア・サポートに関する文献の題目について2009年までの文献を分析対象とした。2010年と2011年の文献を対象としなかったのは、データベースの登録が途中までであることを考慮したためである。

分析方法: 数理システムのテキストマイニングソフトである TextMinigStudio により分析を行った。2011年8月18日にウェブサイト「CiNii」から、「ピア・サポート」のキーワードで、346件の文献（CiNiiの文献を検索したところ、データには文献の重複があったため、重複した箇所は削除した。）を研究対象とした。検索結果を、1行1件の形でデータ化し、CSVファイルを作成した。そして、CSVファイルを Text Minig Studio へ投入し、分析を行った。

結果

表1 基本情報（2009年まで）

項目	値
総行数	346
平均行長(文字数)	35.1
総文数	352
平均文長(文字数)	34.5
延べ単語数	3136
単語種別数	1229

表1より、総行数は346件の文献数を表わす。平均行長とは題目文字数の平均であり、35.1個、延べ単語数は3136個で、単語種別数1229個であった。タイプ・トークン比（金，2009）は、0.39であり、比較的高い値から、多様な単語が各々の論文タイトルで用いられていることが示唆された。

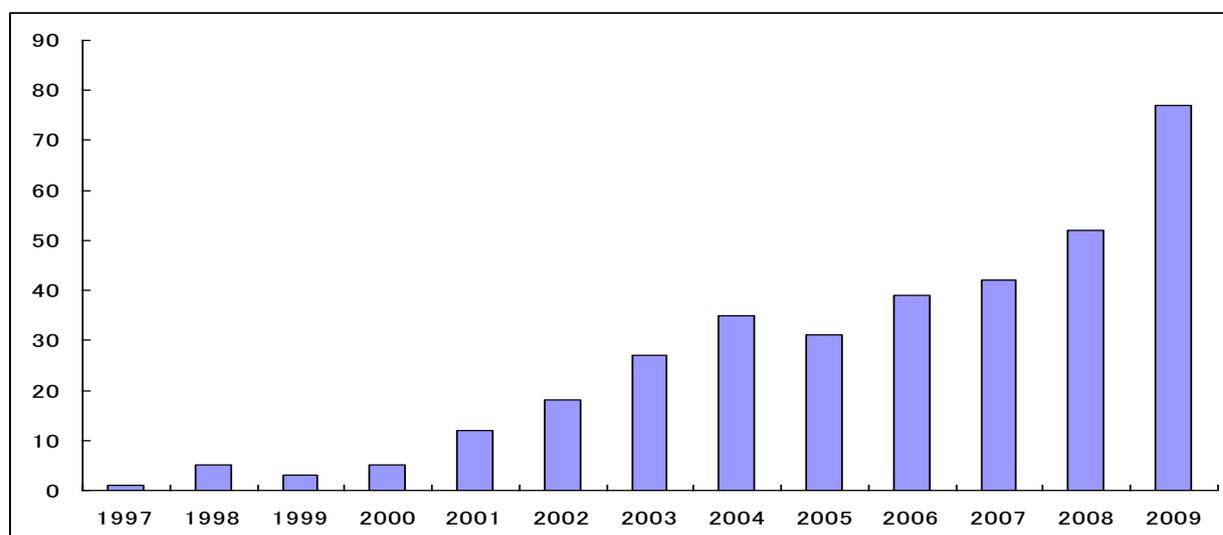


図1 発行年別「ピア・サポート」文献数

図1より、CiNiiでは、1987年から文献が所蔵されているが、ピア・サポートに関して1988年から1996年までは、文献はなかった。また、1997年に初出の文献があり、その後年々文献数が増加し、2009年には、特集が組まれたことによって、より増加しているということが明らかになった。

表2 タイトルで使われている単語頻度（上位20件）

単語	品詞	頻度
ピア・サポート	名詞	151
特集	名詞	56
ピア・サポート活動	名詞	42
学校	名詞	36
実践	名詞	34
効果	名詞	31
作る	動詞	30
子供	名詞	27
プログラム	名詞	23
活力	名詞	23
課題	名詞	22
支える	動詞	17
大学生	名詞	17
検討	名詞	15
通す	動詞	14
目指す	動詞	14
研究	名詞	13
支援	名詞	13
取り組む	動詞	13
対象	名詞	13

表2より、タイトルで使われている単語は、ピア・サポートに関して「ピア・サポート」151個、「ピア・サポート活動」42個があり、対象者については「子供」27個、「大学生」17個であった。そのほかに「実践」34個、「効果」31個、「支援」13個が見られた。

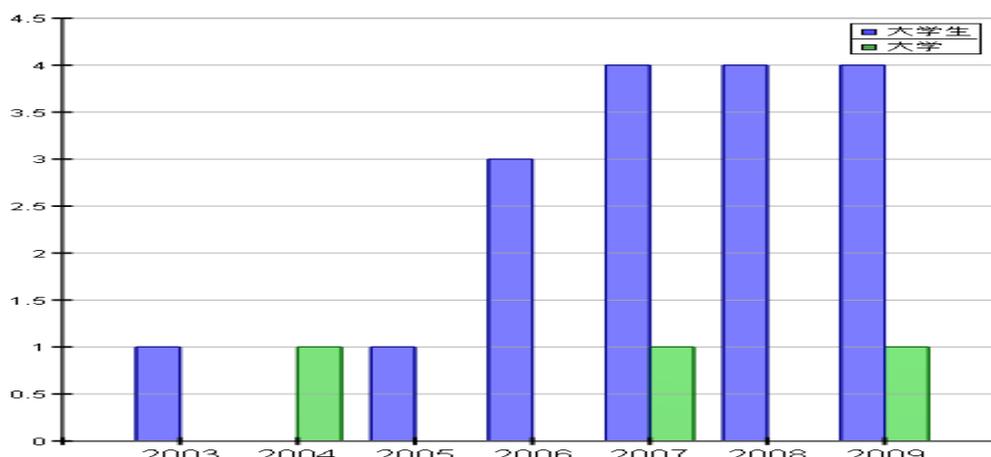


図2 タイトルで「大学」または「大学生」が使われている文献数

単語頻出度にあらわれた「大学生」に着目し、発行年別に「大学」を含む単語頻度を見た。図2では、青色が大学生をあらわし、緑色が大学をあらわしている。題目で「大学生」が使われている文献数は、2003年から出始め、2006年から増えている。「大学生」に対して原文参照したところ、「大学生による小学生へのピア・サポート訓練の実施の効果—社会性についての児童の自己評定と教師による行動評定に着目して」や「個人別態度構造(PAC)分析ピア・サポート活動の効果測定の検討—大学生による中学生へのピア・サポート活動を対象にして—」、「ピア・サポートの適用と効果—高校生を対象とした大学生によるピア・サポート活動の紹介を含めて」など、大学生による小学生や児童に対する支援に関する文献はあるものの、大学生同士のピア・サポートに関する文献については、論文タイトルからは直接確認できなかつた。そこで、改めて「大学」と「ピア・サポート」で2011年までの検索を行った結果を【研究2】において検討することにした。

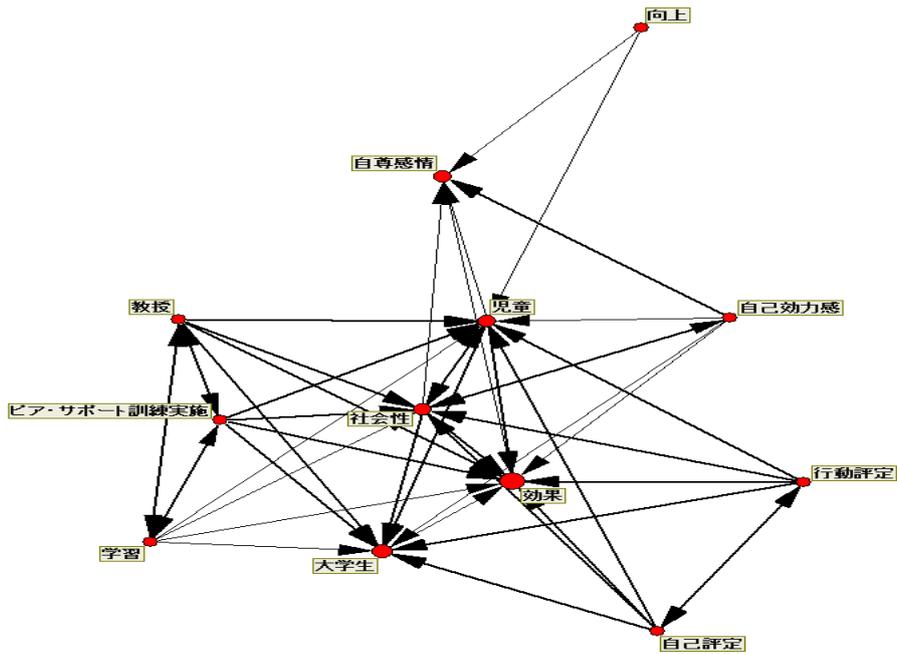


図3 注目単語「児童」からの注目語情報分析

単語頻度で現れた、対象者とどのような単語が結びついているかを見るため、「児童」を注目語とした注目語情報分析を行った。図3より、「児童」との関連は、「自尊感情」や「自己効力感」、「向上」とつながっており、その方法は、「訓練」や「学習」があり、「行動評定」や「自己評定」、「効果」といった形で行われていることが分かった。

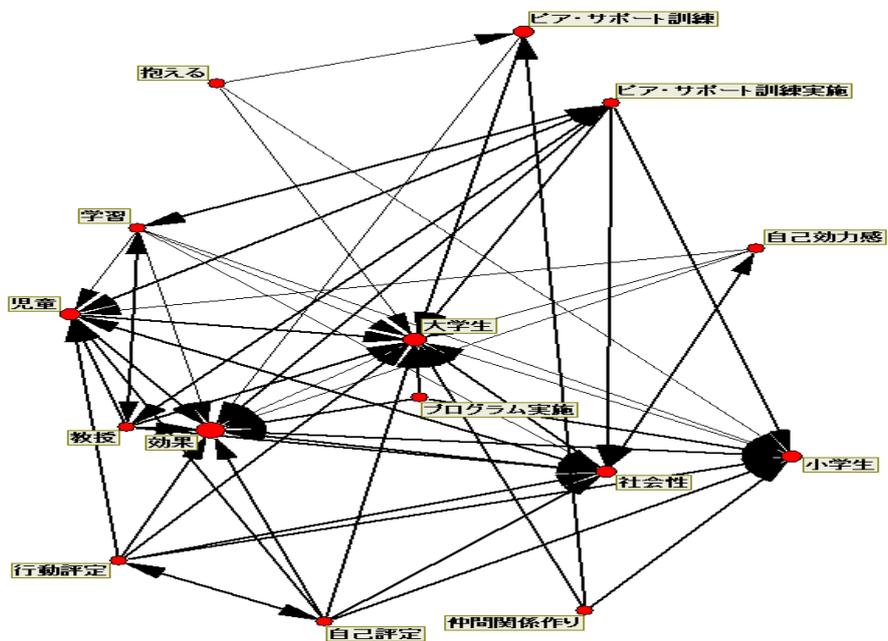


図4 注目単語「大学生」からの注目語情報分析

次に、「大学生」を注目語とした注目語情報分析を行った。図4より、「大学生」との関連は、「大学生」と「教授」という共起があり、対象者である「児童」や「小学生」とともに「自己効力感」、「仲間関係

作り」、「効果」、「ピア・サポート訓練」のつながりがあった。児童や小学生による自己効力感の向上、仲間関係作りを実施していることが分かった。

また、「子供」を注目語とした注目語情報分析を行ったところ、「子供」、「インターンシップ」、「新入生支援」というつながりがあり、原文を参照したところ、「大学におけるピア・サポート活動—新入生支援、インターンシップ、授業の試みピア・サポート—子どもとつくる活力ある学校—ピア・サポートと教育実践」という研究が見られ、大学生同士のピアサポートの研究があることも確認できたので、【研究2】で大学生が関わるピア・サポート研究について調べてみよう。

【研究2】大学生とピア・サポート

目的

「大学生」と「ピア・サポート」をキーワードにして、文献のタイトルをテキストマイニングにより分析する。

方法

【研究1】に引き続き、CiNiiを使用して、「大学生」と「ピア・サポート」の2つのキーワードで2011年現在までの分析を対象とした。また、テキストマイニングで分析する際、サポート対象を「大学生」、「小中高生」、「その他・不明」に分類し属性の項目にまとめた。

結果

基本情報において、「大学」と「ピア・サポート」で検索を行った結果、文献は58件が得られたが、そのうち重複を除く56件を分析の対象とした。ピア・サポート対象の内訳は、「大学生」30件、「小中高生」2件、「その他・不明」4件であった。表3には、属性「大学生」で大学生同士のピア・サポート研究30件の特徴語の分析結果を示した。

表3より、上位3件は、「試み」、「特集ピア・サポート」、「ピア・サポート」であった。他にも、「特集」や「ピア・サポート・ルーム」、「新入生支援」などの特徴語が見られた。そして、属性別単語頻度分析によれば、「効果」は20件であったが、大学生を対象とした研究は2件であった。また、「試み」が大学生のみ8件と出た。また、単語頻度分析においては、大学生の自主的活動としてのピア・サポートに関する文献は確認できなかった。なお、小中高生を対象とした22件の文献においては、「効果」、「自己効力感」などが目立った。そのため、小中高生を対象とした研究が進んでおり、大学生同士では、「試み」がある段階であり、探索的研究があることが明らかになった。

表4より、「特集」の原文を検索したところ、10件のうち9件は、『大学と学生』という厚生補導の雑誌の特集の中で取り上げられていることが分かった。2010年の特集タイトルになったことに示されているように、大学生同士のピア・サポートが本格的に行われつつあるようだ。

表3 属性「大学生（大学生同士のピア・サポート）」特徴語分析

	単語	品詞	属性頻度	全体頻度	指標値
1	試み	名詞	8	8	8.164966
2	特集ピア・サポート	名詞	5	5	5.103104
3	ピア・サポート	名詞	5	6	4.123308
4	考察	名詞	4	4	4.082483
5	大学	名詞	4	4	4.082483
6	特集	名詞	4	4	4.082483
7	支援	名詞	3	3	3.061862
8	事例紹介	名詞	3	3	3.061862
9	得る	動詞	3	3	3.061862
10	ピア・サポート活動	名詞	7	12	2.245366
11	めざす	動詞	2	2	2.041241
12	ピア・サポート・ルーム	名詞	2	2	2.041241
13	愛媛大学リーダーズスクール	名詞	2	2	2.041241
14	学生ボランティア	名詞	2	2	2.041241
15	学生相談活動	名詞	2	2	2.041241
16	現状	名詞	2	2	2.041241
17	向ける	動詞	2	2	2.041241
18	広島大学	名詞	2	2	2.041241
19	受入体制	名詞	2	2	2.041241
20	新た	名詞	2	2	2.041241
21	大学新入生	名詞	2	2	2.041241
22	中心	名詞	2	2	2.041241
23	通信制	名詞	2	2	2.041241
24	白鷗大学	名詞	2	2	2.041241

表4 「特集」に対する原文参照

id	対象	a	j	w	テキスト名	テキスト
7	大学生	大石 由起子, 林 典子, 稲永 努	山口県立大学学術情報 3, 29-44,	2010	t	大学における新入生支援としてのピアサポート活動;立ち上げの2年間をめぐり考察小特集ピアサポートシステムの構築に向けて:ピアの実践を素材に
9	大学生	高田 康信	大学と学生 (87), 52-55,	2010	t	愛媛大学リーダーズスクールから得たものBe alert!とやらに敏感であれ 特集ピア・サポート
10	大学生	河上 上り菜	大学と学生 (87), 49-52,	2010	t	愛媛大学リーダーズスクールから得たもの振り返りとフィードバックチャレンジャー - クリティカルフレンドから得たこと 特集ピア・サポート
11	大学生	秦 敬治	大学と学生 (87), 44-55,	2010	t	体験事例学生支援の新たな試み - 愛媛大学リーダーズ・スクール秦敬治ELS 特集ピア・サポート
12	大学生	加賀美 常美代	大学と学生 (87), 22-28,	2010	t	お茶の水女子大学ピアサポート体制の事例紹介 - 全学的取組と留学生支援を中心に 特集ピア・サポート
13	大学生	山田 剛史	大学と学生 (87), 6-15,	2010	t	ピア・サポートによって拓かれる大学教育の新たな可能性 特集ピア・サポート
36	大学生	早坂 浩志, 大久保 ちひろ	大学と学生 (41), 58-63,	2007	t	岩手大学におけるピア・サポートの取組 特集・メンタルヘルス
43	大学生	宮尾 正樹	大学と学生 (29), 42-47,	2006	t	事例紹介学生同士で支援の論をつなぐ - お茶の水女子大学文教育学部のピアサポート・プログラム 特集・新入生の受入体制
44	大学生	内野 伸司	大学と学生 (29), 17-24,	2006	t	新入生を先輩が支援する広島大学ピア・サポート活動について 特集・新入生の受入体制
56	大学生	児玉 雷一	大学と学生 429, 53-59,	2000	t	事例紹介学生ボランティアによる学生相談活動の試み:広島大学ピア・サポート・ルームのめざすもの 特集 ボランティア活動

考察

【研究1】の結果から、大学における大学生のためのピア・サポートは文献として確かに存在しており、それらの活動は題目からは、まだ「試み」段階であり、定着化していない可能性が考えられる。また、大学生の自主的な取り組みとしてのピア・サポートの活動は文献として存在していない可能性が考えられる。そして、「ピア・サポート・ルーム」や「新入生支援」など、ピア・サポートを実施する空間や、サポートの対象者が存在しており、さまざまな大学のニーズに合わせたピア・サポートの形が存在していることが新たに分かった。

【総合考察】

以上の分析により、大学生による大学生へのサポートの研究は最近になって増えていること、しかしその数はそれほど多くないことが【研究1】と【研究2】の結果から明らかになった。それでは、大学生へのサポートの必要性と実践にはどのような問題があるのだろうか。筆者の実践をふまえながら論じてみたい。

（1）現代の大学生が抱える困難について

鶴田（2002）は、大学生の学生生活で抱える心の葛藤やつまづきについて、「入学期」、「中間期」、「卒業期」に分けてそれぞれ捉えている。よって、以下に3つの時期を私の経験もふまえながら要約した。

〔入学期〕

大学1年目においては、学生が今まで慣れ親しんだ生活から離れ、大学での新しい生活へと移行する時期である。この時期は、生活上の変化が大きく、多くのことを自分で決めるよう求められる。そのような状況に対し、新入生は何から始めれば良いのか、どう始めれば良いのか分からず混乱する。具体的な困難について、4点挙げる。

1つ目は、履修手続きにおける困難である。時間割りの作り方が分からない、資格課程や卒業単位についての登録上の疑問が解消できていない、情報の活用（掲示板や大学のHPなど）の仕方が分からず、講義や学校内の情報を得ることができないなどの困難が考えられる。2つ目は、講義についての困難である。90分の授業時間での集中困難や、ディスカッション形式の授業の場合に人前で自分の意見を伝えることにストレスを感じたりして、自主休講、遅刻、途中退出などの問題が起きる。また、課題や試験においては、自主性に任せた授業方針によって、授業内容が分からずついていけないという困難が生じ、基準の点数をとることができなかつたり、論述することが不得意なためにレポート課題ができなかつたりといった問題が起きる。3つ目は、生活面における困難である。サークルの新歓コンパやゼミの交流会などでの飲酒、キャンパス内での喫煙、パチンコやスロットなどで、これまで自分の知らなかった「楽しい世界」から抜け出せなくなり、不規則な生活習慣が生まれるといった問題が起きる。4つ目は、対人関係における困難である。広く浅く、あるいは狭く浅い人間関係を作ろうとし、相手に必要以上の気を遣い、自分自身の内面に触れることを極力避けようとする。すなわち、自分の気持ちを伝えて、相手の考えを知り、理解し合うといった過程をふむことができず、その場限りの関わり合いを作ることによって、自分を見つめなおす機会を失う。そのことで、コミュニケーション力や問題解決力といったものが身に付かなくなり、常に他者評価を気にしているといった問題が生じる。

〔中間期〕

大学2・3年目においては、人間関係と学校生活全般の葛藤やつまづきが生じる。

人間関係においては、自分を隠して浅い関係を続けることに対して自己内での葛藤が起き、1年目の友人関係が上手く保てなくなるという困難である。例えば、学校生活に慣れて気が緩み始めたときに、自分が今まで見せてこなかったある一面を見せたとする。そのことに対して、友人に指摘されたことで、「いつもの自分」に戻ろうとする自分と「本当の自分」を出そうとする自分との間で葛藤が起きる。また、逆の場合も考えられる。自分ではなく、相手がこれまで見せてこなかった一面を何らかのきっかけで見せた場合に、自分の内面に踏み込んでくるのではないかという不安や恐れが生じる。以上のようなつまづきから、友人関係が自然消滅的、あるいは突発的に崩壊するという現象が起きる。

学校生活においては、中だるみの時期とも言われているが、履修の仕方や効率のよい単位の取り方な

どを知ったことで自身の成長につなげていくような取り組みを行わなくなる。授業が終わると、そのまま帰宅したりアルバイトに向かったりサークルに顔を出したりと、生活リズムが一定で、変化のない生活を送るようになる。時間をかけて自分を見つめることが出来る時期であり、学校生活を展開して自分らしさを模索する時期である反面、スランプや無気力、無関心に陥りやすくなる時期でもある。

〔卒業期〕

最後に、大学4年目においては、学生生活を終えて社会生活へと移行する時期であり、将来への準備を本格的にする時期である。大学での対人関係や学生生活からの別れを前にして、集中的に心の整理や学生生活のまとめを行い、今まで未解決であった課題に向き合う時期でもある。

この時期に生じる困難は、3つ考えられる。1つ目は、卒業を前にした学業への集中困難や単位不足などの混乱である。2つ目は、進路選択の迷いや就職活動・将来への不安などである。3つ目は、対人関係の状況の変化に対する戸惑いや学生生活を終えることへの抵抗感などである。

（2）和光大学でのピア・サポート団体「OHP」の活動について

OHPとは、2009年の1月に結成された和光大学現代人間学部心理教育学科の学生達による団体である。内容は、4月に2日間を使って行われる心理教育学科の新入生オリエンテーションに上級生が参加して、新入生の不安や疑問を解消するための手伝いをするというものである（小澤, 2010）。

学科の教員が、「2009年度は、新入生オリエンテーションに関わる上級生グループを作りたい。」と考え、2008年度のオリエンテーションに上級生として参加していた私に声をかけた。私は2年生（新3年生、以下3年生）の友人達に声をかけ、10人集めた。そして、1年生（新2年生、以下2年生）は去年と同じように各プロゼミから2人から3人ずつ呼びかけ、13人集まった。1、2年生合わせて23名の上級生グループ、OHP（Ozawa Hello Project 小澤ハロープロジェクト）が誕生した。

OHPが集まった回数は、1月から4月までの間で8回である。まず、第1回目の会議において、「オリエンテーションをどのような場所にしたいのかということについて3つ挙げた。

1つ目は、新入生がつながりを持てるような場所である。これは、新入生同士や上級生、教員とのつながりを作り、オリエンテーションが終わった後も新入生が気軽に質問や相談が出来る関係にしたいと考えたからである。2つ目は、新入生の疑問や不安が少しでも解消できる場所である。新入生は、かなり不安定な精神状態で入学してくる。よく耳にするのは、「訳も分からず優しそうな先輩について行ったら飲みサークルで無理やり酒を飲まさせられた。」や「先生は何も分かってくれない。」「友達は上辺だけで信用できない。」などといった話である。新入生は、あらゆることが初めての体験であり緊張感や不安感を抱えて、何とか乗り切ろうと一枚厚い仮面を被って大学生活をスタートする。3つ目は、新入生が心理教育学科の面白いところを知ることが出来る場所である。スタッフが「OHPだからできること」さらに言えば、「心理教育学科だからできること」を知ることが大切である。心理教育学科は、エリクソンやピアジェなどの専門的な学問だけでなく、臨床心理や教育現場などの現状を知ることが出来、プロゼミや授業でのロールプレイやアイスブレイキングなどを体験して、カウンセリングやコミュニケーションの方法などを学ぶことが出来る。この経験を活かして、OHPがやりがいや楽しさを感じながらオリエンテーションに参加して欲しいと考えた。

以上3つの場所を作るために、限られた時間の中で何が出来るかについて、「コミュニケーションゲーム」、「時間割り作りの手伝い」、「上級生への質問タイム」という3つの提案をした。そして、この3つの提案を行うために様々な準備を行った。

コミュニケーションゲームについては、2、3年生がプロゼミのときに学んだコミュニケーションゲームを自分たちで新しいゲームに作り変えて、2年生チーム（3人）と3年生チーム（2人）に分けて、2つのコミュニケーションゲームを作った。はじめに、いくつか考えてきてもらい、実際にOHPで2チームが用意したゲームを体験して、一番良いと思われるゲームを選んだ。

時間割り作りの手伝いについては、「ロールプレイ」や「OHPの冊子の作成」などを行った。ロールプレイは、新入生オリエンテーションの場を想定して体感するというものであり、新入生役と上級生役、観察役に分かれてそれぞれの役を演じてもらった。新入生役にはクジを引いてもらい、「極端に緊張している人」や「質問したいがうまく言葉にできない人」などの具体的な役柄をロールプレイが終了するまで誰にも発表せずに演じるよう指示した。

新入生役からは、「いつの間にか、その役に入り込んでいる自分に気付いた。」や「確かに、こういったタイプの新入生がいる。」などの感想がでた。上級生役からは、「色々なタイプの新入生にどう関わっていけば良いか考えた。」や「新入生からの質問に、ほとんど答えられなかった。」などの感想がでた。観察役からは、「オリエンテーションの雰囲気を感じる事ができた。」や「自分が新入生だったら、上級生だったらと両者の視点で捉える事ができた。」などの感想がでた。

OHP冊子とは、新入生にOHPを知ってもらうこと、履修や学校生活の不安を解消することを目的として、OHPが作成した冊子である。内容は、OHPメンバーの顔写真入り自己紹介や卒業重視の時間割りや教職などの資格課程重視の時間割りなどの時間割りモデル、事前にOHPで出し合った履修や学校生活で感じたことや疑問を載せた、学校生活のQ&Aなどである。

上級生への質問タイムについては、2日間のオリエンテーション中に、一日目は新入生から質問を受け付け、回答できなかった質問をメモしておき、二日目のオリエンテーションに模造紙で作った回答を貼りだした。また、二日目にでた質問に関しては後日プリントにして配布した。

そして、新入生オリエンテーション終了後に5日間のアフターフォロー期間を設けた。内容は昼休みを使って、一つの部屋を貸し切りOHPと話しをしたり、昼食をとったりすることができる場所である。

オリエンテーションとアフターフォロー終了後の反省会では、様々な意見がでた。ある2年生は、「OHPに入った動機は、自分が1年生のときのオリエンテーションに参加した上級生たちがあまり良くなかったので、変えようと思った。しかし、OHPに参加して当時の上級生の状況が分かって、ちゃんと団体として準備をして本番を迎えられて良かったと思う。」と述べた。他にも、「少ない期間での交流だったが、OHPに居るときが一番楽しかった。」や「ただ時間割作りの手伝いをするだけではなくて、ゲームをしたり冊子を作ったりしたことで、自分たち（OHP）も楽しめて、新入生にも喜んで貰えたことが良かった。」などの感想がでた。

(3) 本研究のまとめ

今回のデータ分析における結果を通して、ピア・サポートの効果とは、「自尊感情」や「自己効力感」、「仲間関係づくり」の向上が考えられ、その方法は、「訓練」や「教授」といった形で行われていることが多かった。しかし、大学生同士では「ピア・サポート活動」という表現も見られた。また、大学生によるピア・サポートの対象は小中高生に対するものと、大学生同士でのサポート研究との両方が有ったことが分かった。これは、ピア・サポートの位置付けが、年長者の誰かが、自分達の経験や体験を踏まえて、後輩たちに伝授していくという考え方と、たとえ年齢の違いがあっても、小澤（2010）にみられるような、ピア・サポートの対等性を強調するという2つの立場があることが明らかになった。

筆者の実践と研究（小澤,2010）をふまえると、大学生同士のピア・サポートとは、「支援する、される」関係ではなく、対等な立場で行われるサポートであるべきだと考える。テキストマイニングの結果に現れたように、人と人との交流の中で、互いの人間関係力を引き出し合うことであり、自己肯定感や他者理解、さらには自己分析を行うことは、小学校から大学まで共通の課題であると考えられる。仲間とのコミュニケーションの中で、新しい自分を発見したり、自己理解や他者理解を行い、自身のステップアップにつながるものがピア・サポートの特長である。誰か（何か）のために、自分のために何らかのアクションを起こすことが、「自分はここに居て良いのだ」という生きる力につながるものであり、そのような居場所を提供することがピア・サポート活動の重要な役割である。

本研究の限界と今後の課題

本研究の限界とは、第一に、タイトルのみ分析に留まり内容の分析に至らなかったことである。データベース「CiNii」のみの利用であり、タイトルだけでは中身がわからないなどの問題がある。第二に、「ピア・サポート」というキーワードだけではなく、それと置き換えられるキーワード、たとえば「ピアカウンセリング」や「自助グループ」など、いくつものキーワードを使って検索することで、さらに分析が深まるだろう。第三に、今回の研究では、ピア・サポートに関する文献の中に、大学生自らがピア・サポートグループを立ち上げているといった自主的なサポートの形についての文献が、タイトルからはあまり確認できなかったことである。小・中学生に対して大学生が支援することは重要であるが、そこで必要とされている「自己効力感」や「仲間関係作り」といったものは、大学生自身にも求められる力である。大学生の「大学生による大学生のための」ピア・サポート（小澤,2010）のさらなる実践の深化の必要性とそれがもたらす可能性について今後も考え、実践と研究を進めていきたい。

謝辞

この度の学生研究奨励賞の原稿作成にあたり、Text Minig Studio を貸与して下さった数理システムに感謝致します。また、ご指導くださった和光大学の伊藤武彦先生に心から感謝致します。

参考・引用文献

- ・小澤笑子（2010）『大学生による大学生のためのコミュニケーションサポートとは』和光大学卒業論文（未公刊）
- ・鶴田和美「青年期のアイデンティティ—大学生とアイデンティティ形成の問題」臨床心理学会 編『臨床心理学』第2巻6号(2002)
- ・鶴田和美・齋藤憲司『学生相談シンポジウム 大学カウンセラーが語る実践と研究』（2006,培風館）
- ・鶴田和美 編『事例から学ぶ学生相談』（2010,北大路書房）
- ・武内清 編『大学とキャンパスライフ』の（2005,ぎょうせい）
- ・鳥山平三『キャンパスのカウンセリング相談事例から見た現代の青年期心性と壮年期心性』（2006,風間書房）
- ・川畑恵子「生徒同士の人間関係形成能力を高めるピア・サポートプログラムの開発に向けての予備研究」『奈良教育大学教職大学院研究紀要 学校教育実践研究』第1巻 p.115 -122（2009）